

ふいとり

岡本吉猶

暮らしのなかにふいとり(汽笛)があった。朝6時、正午、夕方6時、たしかこの三回「ピーーッ」と鳴っていたと思う。幼い頃は特に正午のふいとりに思い出がある。そろそろ正午が近づくと、空腹のためぶつぶつと不満を訴え、泣きベソをかき始める。そんなとき決まり文句のように「ふいとりが鳴ったらごはんにせるけん、もうちょつと辛抱せい。」といわれた。しかたがないので祖父や祖母の近くでゴソゴソと畑の土をいじったり、小石をころがしたりして時間をもてあましていた。そうこうするうちにやがて、「ピーーッ」と音がして、やっつとで昼飯にありつけたものだ。

あの音はどこから出ているのだろうか？ 岡坂の醤油屋のふいとりだと聞いたがどんな所だろうか？ ちょうど二・三軒北隣の家の横へ行くと岡坂の工場が見えるので、どうしても、一度鳴っているときを見たいと思うようになった。

「ピーーッ」と鳴ったので急いで走って行ったが、屋根のあたりに白い煙のようなものがかすかに見えるだけで、よくわからない。鳴ってから見に行くのでは遅い。もう鳴る頃だと思っても間に合わない。こうなると見たい一心がつり、もうそろそろという頃に、早めにその場所で待つことにした。

白壁の醤油醸造場は、ゆるやかな勾配で連なるたんぼの、その上の小高い所に見える。距離は4、5百米ぐらいあろうか、待つこと暫し、その屋根の一隅から白い細い筋のようなものが上へ向かって飛び出した。と、その時一瞬遅れて「ピーーッ」というあの音が聞こえた。あっ。ふいとりだ。長い間気懸かりだったものを、初めて見た瞬間だった。勿論音が後から聞こえたことに何の疑問も持たなかった。

